



北 邦 彦

飛躍の幻想と脚



都市における共同体運動の可能性について考えてみる時、ほくの場合には、ほくが関わっていた農村共同体建設の運動の顛末と、今のほくの都市での生活とを照らしあわせて語るのが、そのアプローチとしては一番ふさわしいように思う。

(一) マイナス体験

すこし最近下火になった共同体ブームだが、ほく達が、農村に共同体を、とよびかけた一

昨年あたりはまさしくブームの絶頂にあった。ちょうどミニコミブーム、公害ブームなどと軌を一にしながら、そして、その時流に乗せられてしまったほく達の運動は、外見的な華やかさとは裏腹に、惨めな内部の傷口をさらして消滅していかねばならなかった。組織の出发点からして内部ではほとんどエネルギーも創造力も失なわれていたので、それは当然の成行きでもあった。ただ唯一の救いは、傷口もあらわに崩壊し、内部分裂していくという徹底してマイナスの役割を演じざるその過程

の中で、それまでむくろ同然だった個々がマの自己を表現し、お互いが捨身でぶつかりあいながら、徐々に個体としての生を取り戻していったことである。そのことによって、ほく達ひとりひとりに新たな創造への道を暗示し、その活力を植えつけていった。

そのひとつは、他の様々な運動を担う組織の誕生から解体に至るプロセスと共通する軌跡をくつきりと残して解体しきったことである。その軌跡は、ほく達の心の奥底にマイナスの符号をつけた体験として刻みこまれた。

ほく達が今、自己が属している組織の矛盾を透視できるとすれば、それは、あの日あの時の彼の表情が……といった深い実感の意味を今の現実と夕づらせながらよみがえらせているからである。それはひとつの客観性、法則性として認識されていく。実感と遊離しないところで得られた理論は、これから僕が生き闘いつづけるためには欠かせない武器である。その意味であの体験はかけがえないものがあった。

いまひとつは、これがこの稿で述べる主題となるものだが、これまでの自己を運動や共同体にむかわせていた立脚点なるものを根本的に問い直すに至ったことである。それは立脚点の問題以前に、ほく達は脚を持って生きてきたのだろうか、という疑問にまで及んでくる。

ほく達の場合、それまでの学生生活、サラリーマン生活に癒されぬものを感じつつ漠然と生きてきた者達が、その心情を一点に凝縮させた形でその共同体運動にのめり込むというの、ほとんどに共通するスタイルであった。そこでは、過去の自己の生活というのは、かなぐり捨て、否定しざるものでしかない。喫茶店で冗談を言いながら時をすごした

友人との、また、夜遅くの帰宅に愚痴をこぼしながらも夕飯の仕度をしてくれた母親とのという生活日常での関係をすっぱりきれいに切り去ることが、その運動へのめりこむ要件となる。つまり、それまでの生活が仮りのものであつて、どこかに本当に人間らしい生活の場があり、いつかはその中に全身全霊を打ち込みたいと想っている。そうした意識がテコとなって新たな生への飛躍を、という幻想を生む。それがひとつの集団としての幻想にまで抜がっていったものが、ほく達の仮構としての農村共同体であつたといつてよい。

それは当然のことながら市民生活の否定の上に成り立っていた。それは、たとえば、酒を飲むといったような欲望の抑制、あるいは禁圧を、一方ではおのずからに課し、他方では組織的に強いられる。それは禁欲的な生活

態度と、完全無欠な主体の確立という方向へしやにむに進む。これははためにはこっけいに、そして異常に見えるかもしれないが、トータルに市民生活し、それをとことんまでつきつめようとする時、それは起こりうることである。連合赤軍の山村アジトでの生活をマスコミがスキャンダル一色に塗りつぶして叫騷し、それを受けとった市民生活者が、まず

驚きの声をあげたのは、そこでの生活があまりにも市民社会の常識とは懸け離れたものであつたからである。そして実際、暴力政治革命を唯一の突破口として想定し、一揆に市民社会を突き破ろうとした彼らの内側では、振り切つても、振り切つてもつきまとう市民生活日常との異常なまでの格闘があつたことと思われる。マスコミが市民社会の代弁者、良識者として彼らに向けている非難に耳を貸す必要はない。ただ市民社会を観念的に乗り越えたと思ひ込むことの危険性と、結局、ひとりひとりの血肉にまで滲みこんだ汚れは、時間をかけて、ひとりひとりが洗い出す以外にないことに気づけばよい。

ほく達のこと話を戻そう。ほく達は市民生活と絶縁せねばならないし、絶縁しようと思つてた。それ以外に都市に生きてきたものが、まったく生活基盤のちがう農村に入っていくというバネがみつからなかったからである。もつと直截に言えば、都市の日常の中では生きていく実感がかめず、農村にこそその生きる何かがあるのではないか、と心情的なところで思い込んだものにとつて、都市の日常生活の様々な問題はとるに足らぬものとしてその視野から消えてしまう。そして、

自己をそういったものからふっきた存在として想定してしまうことにもなる。そうした思い込みが、農村以外に生きる場所はない、あるいは、この運動、この組織こそが唯一のものだ、というような独善の道へ陥らせてしまふ。これが他の運動や組織とのつらなりを絶ち、関わっている個人を切り捨て、孤立化し、それはますます独善化の傾向を強める。それを組織の中の問題として見た場合、横の人間に対して、同じ意識を持つようにならざるやうという力が働き、同化の程度によってその個人の組織への関わり具合や組織の効率が判断されてしまふ。つまり、思い込みの深いものがその組織を事実上動かすこととなり、それに徹せないものは市民生活を否定しえておらず、農村で生きる資格はない、ということと組織的な批判をあげる。

その端的な現われが、ひとりの女性が精神分裂の状態に陥ったことである。彼女は直感的にこの運動、組織が人間にとって大切な何かを殺すものであることをさとっていた。ただ彼女は、居直ることも、抜け出すこともせず、内へ内へともっていった。快活であった彼女がほとんど見る影もなく憔悴し、まったく暗部部屋の真中にただひとりうずくまっていた。

を見出した様子がよく読みとれた。ぼくはこんなことに出会うと、むしろ嬉しくなってしまう性質なのだ、自己の主体を形成していく道とは、状況がいかに暗くとも、みずからの足で、ゆつくり、着実にみずからの生にめざめ、みずからを解放しつつ進んでゆくものだ、とあらためて痛感してしまう。そして、その中で他者とふれあい、愛し合うことのできる関係を創り出しえたら、それはその暗い状況を突き破って未来からさしこんでくる一筋の光明にも値する。そうしたものが、ぼくが、どこにいても、何をしても、その創意と工夫の限りを尽くして守り育てていかねばならないものである。生きる喜びとは、すなわち創造の喜びである。

こうした関係の芽は、他でもないぼくが生活している日常の中にこそある。現象というペールをかむって、それは容易にその姿をあらわにはしない。それをはぎとり、現実を五官で感じ、その中からみずみずしいものを生み出すには、まずぼくが生活日常に食い入り、生活者と深く交わり、みずからが生活者となる以外にない。そうしてはじめて、ぼくを受け入れるあの開かれた微笑に接することができる。そこでは、これまでの運動や組織とい

た姿は、今もぼくの脳裏に焼きついて離れない。その彼女を見殺しにしたぼく達の組織は、当然坂道をころがり落ちるように破局の道を進んで行った。しかし、ぼく達が先の思い込みや幻想から本当に解放されるには、その運動、組織といった目に見えるものの消滅を待たねばならなかった。

結局、市民生活の否定をかかえてやみくもに突っ走ったぼく達の集団は、金の問題などの現実的な困難に直面した時、それを処理する実務能力の無さ、現実変革を成しえない弱さを露呈し、互解していった。そして個々はその市民生活に舞い戻っていくことになってしまった。

(二) 生活日常を見る目

問題はこれからである。そうした幻想から解放された時、ぼく達はただの平凡な市民生活者でしかないことになつと気づく。そして今まではぼく達はただの平凡な市民生活者ですらありえなかったことにも。従って、無論のこと現実生活に生活し、そしてあくまで生活者の視点に立って現実を凝視するなどということがありえようはずがない。現実には密着せず、

う目に見えていたものが、ずつと彼方へ消え去り、次にうすぼんやりと、そして次第にはつきり、これまで目に見えなかった人と人との連なりが見えはじめる。それは、横で生活している人間を本当に大切だと思うところから削られていくものだ。

(三) 現場にて

ぼくが今職場でやっていることは、以上述べたぼくの生き方に根ざしたひとつの方法実験である。職場の日常の身近な問題を小さなものとして見過ごすことなく、できるだけそれに照明を与え、ぼくとぼくの横で働いている同僚との関係の中で、その職場をつくりかえ、ぼく達ひとりひとりのものにしていく、という試みである。しかし言うは易く行うは難しで、ぼくがどれだけ生活日常に徹し、生活者の意識に迫りえているか、と振り返ってみる時、ぼくの成しえていることの小ささと、これからの道のりの長さ、日常革命の辛さに啞然とする始末である。でも泣き言はいわず歩いていく。

職場にいてまず感じることとは、そこが生活の一部でしかないにもかかわらず、現実には

抽象的に語ることによって、ラディカルを装っていたにすぎなかった。自己がそういった存在でしかなかったことを認めるのは苦痛である。しかし、ぼくの中ではそれを認めてかかる場所から出発しよう、という決心が固まりつつあった。いかにみずばらしい生き方になるとしても、その過程で得たものを手がかりにして生きていく以外にない。飛躍はありえないのだ、と思いついた。脚のなかつたものによりやく脚がはえてきたようなものである。それは誰に頼ることなく、誰からも強制されることなく、おのれが生活し、見、聞き、感じたものを基本にして判断していくという態度でもあった。現実には密着し、具体的に徹し、自己の生を生きつづけること。自己の身辺にある様々な問題から逃げず、それを担うことによつてそれを糧として生きること。それがこれからのぼくの運動でなければならぬ、と。

先日、先の運動に関わった仲間内のある女性から一通の手紙をうけた。一緒にいたころはおとなしく、目立たない、ひよわな感じをただよわせていた彼女であるが、その手紙の調子は力強く、今いる職場の中の具体的な問題と苦闘しながら、何か生きるはり

ほとんどの人が社会との接触を職場を通してしか持たえていないということである。だから、そこでの生活実感というのは個々にとつて深く大きな意味を持つ。生活日常というのは職場の日常のことであり、生活意識のほとんどは職場の日常の中で形成されていく。職場が単に生計を得るための場というところからは、若い世代にはほとんど見られない。そこは、共に働き集う楽しさをわかちあう場としてある。家庭を持つている中高年層になれば、生計を得る場としての比重が大きくなるが、意識の底の方では若い世代と共通するものがある。いずれにしても、そこで日々感じる労働者としての誇りや喜び、悩みといったものは、人格形成の上で重要な意味を持つ。ところが、その重要な職場において、実際は共有しうるものはほとんどなく、孤独感をかみしめながら、職場の作業の歯車としてやつと自己をつなぎとめているのが現状である。労働組合が強力であるか、ないか、はその辺の問題とはほとんど関係がない。むしろ労働組合の体質からいって、強力であればある程、政治の歯車の中に個人を組み込み、量として労働者を扱ってしまうという傾向が強い。

ぼくの今いる職場が、形態としては労働者

